

ミュージアムの社会的役割

～クリティカル・シンキング (Critical Thinking) の 視点から検証する～

千葉市科学館 館長補佐 新 和 宏

1. はじめに

昨今、我々を取り巻く諸環境の中で極度に遅延している、または、できていないことの一つに国民のクリティカル・シンキング（批判的思考 以下、Critical Thinking）がある。COVID-19 による緊急事態宣言下における低意識はもとより、我々ミュージアムに関わる者が館事業として取り上げることが多い外来種問題や環境問題の領域においても顕著な事例が数多く現出している。千葉市科学館（以下、当館）では、昨年度の企画展「ちばの海 まるごと探究展」、そして、今年度実施した「海と日本 PROJECT ミッション 2021 自然エネルギーの活用で本来の地球環境を取り戻せ！～洋上風力発電を中心として～」の中で、生物多様性、捕鯨漁、海洋ゴミ等の海洋環境、再生可能エネルギー関連のテーマを取り上げた。

これらはミュージアムで取り上げるべき重要なテーマであるが、その際、企画者として明確な事業趣旨を設定し、自館で実施する意味を全スタッフが共通認識した上で慎重に推進していかなければならないテーマでもある。そして我々はこれらの取り組みを通して、Critical Thinking の視点で物事をとらえていく重要性を館内外に示唆していく必要があると考えている。

当研究発表はミュージアムが展開する事業の中からミュージアムとして取り組むべきテーマではあるが、実施に際しては留意すべき点が数多くある事例を提起し、それらを Critical Thinking の視点で検証していくことでミュージアムの社会的役割を再提起するものである。

2. 当研究発表タイトルの背景と論ずる視点

当館は、第 28 回全国科学博物館協議会研究発表大会（オンライン）で「千葉市科学館の企画展 ちばの海まるごと探究展で具現化したサイエンス・コミュニケーションの新機軸」（武岡・新 2021）、第 27 回大会（高知県）で「持続可能な社会における科学系博物館の新たな使命～サイエンス・リテラシーの向上を目指して～」（後藤・新 2020）、第 26 回大会（愛知県）で「海の学びが地域をつなぐ～地域力を高めるネットワーク構築の実例から～」（武岡 2019）のタイトルで研究発表を行った。この 3 つの研究発表では、当館が展開している事業をもとに、科学館としての使命、スタッフとしての使命を提起した上で新たなミュージアムの

在り方について提言し、それを体現する際に必要な組織としてのガバナンス、および、スタッフの意識改革について論じ、併せて、利用者側のリテラシー向上の重要性についても言及した。

さらに、筆者が千葉県立中央博物館（以下、中央博）に在籍時には、第 25 回大会（福岡県）で「海洋教育を体現する際のフィールド・ミュージアムの使命～特に我が国の将来を直近で担う中高生を中心とした学びの場構築～」(新・奥野 2018)、第 24 回大会（京都府）で「展示室はフィールドへの誘いの場 “本物を利活用する！” そこにミュージアムの本質があり、地域の活性化と地域文化創出・発展の起点が芽生える」(新 2017)、第 22 回大会（北海道）で「自然科学系博物館が発信するインタラクティブ・ミュージアム (Interactive Museum) 構築に向けた提言ー無限の可能性を導き出す新たなミュージアム論の展開ー」(新 2015) のタイトルで研究発表を行った。これらの中では、一貫して筆者が構築しているミュージアム論を体現し、それらを検証・考察することでそれぞれの時代に即応したミュージアム論を提言した。ただし、提言の中には COVID-19 を経て内容的には見直し（別の観点からのアプローチ）が必要な部分もあるが、筆者が提唱している Interactive Museum 論（新 2017）は、時代や世情、社会情勢、教育現場等の変容・変化に関係なく機能する Museum 論であることは今後もぶれることはない。

以上の各論文中にも記述しているとおり、筆者は千葉の県立博物館在籍時、博物館の統括の任を持って在籍していた千葉県教育委員会時、さらに人事交流で出向していた国立歴史民俗博物館（以下、歴博）時の全領域で自らの研究知見を基軸とした学びの場を創出してきた。現在まで 35 年以上ミュージアム界に関わってきた経験から、当研究発表のテーマである「博物館の社会的役割を考える～変動する社会における博物館の運営と活動～」に即した論点で、特に現在の我が国において大いに希薄であると考察している Critical Thinking の視点からミュージアムの社会的役割について事例提示と併せて具体的な提言を行うこととする。

3. ミュージアムがあつかう事業とその課題・・・総論

筆者は中央博時代、そして現在の当館において数多くの学びの場の創出を体現してきた。

中央博においては、企画展「生物多様性 1：生命のにぎわいとつながり」(2009)、特別イベント「科博コラボ・ミュージアム in 千葉ー恐竜アロサウルスとその時代の生き物たちー」(2012)、企画展「妖怪と出会う夏 in Chiba 2015」(2015)、「サンゴ礁の生きものたち」等企画展マリンサイエンスギャラリー（2017～2019）を事業の中核者かつ総括者として取り組んできた。

そして、当館においては、館内に海の学び PROJECT チームを立ち上げ、磯の観察会をはじめ、里山観察会、各種調査、各種ワークショップを文化庁や公益財団法人日本海事科学振興財団船の科学館海の学びミュージアムサポートの外部ファンドを活用して学びの場を創出し、その Phase1 の集大成として、2020 年度に企画展「ちばの海まるごと探究展」(海の学びミュージアムサポート Program 1) を実施した。当企画展では、サブテーマとして「ちばの海を生き

ものから・歴史から・文化から、いろいろな視点から調べてみよう！」をきっかけ、海をキーワードとした多角的な展開を体現した。具体的には千葉の海の自然、歴史、文化等多角的な展示構成とし、生物多様性の維持や環境問題、持続可能な社会の実現等の現代社会の重要課題を取り上げ、科学館スタッフと見学者がこれらのことを共に考え、自らがどういった行動をとれば良いか、何をしていけば良いか等について考えることができる構成とした。当企画展の詳細とその検証は、先述の「千葉市科学館の企画展 ちばの海まるごと探究展で具現化したサイエンス・コミュニケーションの新機軸」（武岡・新 2021）で行った。さらに今年度（2021 年度）、日本財団の助成事業である「海と日本 PROJECT サポートプログラムー海の宝アカデミックコンテスト」の千葉ユニット事業（筆者が事業代表者）として、事業代表の北海道大学大学院水産科学研究院長との連携で「海と日本 PROJECT ミッション 2021 自然エネルギーの活用で本来の地球環境を取り戻せ！～洋上風力発電を中心として～」を実施した。

以上の実践事例としてあげただけでもワークショップの類まで包含すると数十種類の学びの場を創出しているが、それ以前においても専門領域の事業として化石関係の特別展を数回、化石関連の講座は年間 10 回以上、他に、海洋生物関連の展覧会、捕鯨関係の展覧会をはじめとした企画を多数展開してきた。加えて、歴博においては関東大震災と民衆、アイヌ文化、戦争と国際情勢といった National Museum として取り組む際、慎重な体制で推進していかなければならない事案に数多く関わってきた。

上記の事業のテーマを見ても分かるが、今までに取り組んできた諸事業には必ずと言っていいほど生物多様性、自然環境、社会環境、持続可能な社会、開発、国際情勢、変容する教育システムといった重要なテーマではあるが実施に際しては充分は体制強化をもって取り組まなければならない内容が含まれており、これらは、昨今の SDGs や Society 5.0 とともに大きく作用し合っているのは明白である。学術研究機関であり学びの場の創出機関であるミュージアム、そしてその個々の取り組みにおいて中核的人材であるミュージアムスタッフは、こういったテーマにいかに対峙していく必要があるのだろうか。また、それを活用する利用者側や市民はどういった意識を有しておく必要があるのだろうか。SDGs や Society 5.0 等の昨今の世界的な目標や目指すべき領域はかなり浸透し、ミュージアムの現場だけではなく、学校や社会活動の中で企業や NPO 等市民団体等においても様々な取り組みを行っている実態はある。

しかし、筆者が様々な観点からその取り組みと市民の意識を検証すると、SDGs や Society 5.0 の概要説明で終わっている例、何らかの取り組みを行っているがその趣旨が不明確な例、取り組みに参画しているがそれが実生活内で生きていない例は多々見受けられる。さらに COVID-19 に関連した国の取り組みや方向性、それを受け止める国民の意識の面、加えて、生物多様性や環境の観点では早急な見直しの必要性を示唆している危機的な状況であると検証している。

筆者がその要因としてとらえていることは次の 2 点である。一つは、様々な領域に作用し合うはずの物事や事象に関する取り組みや目指すべき方向性の構築や改善策構築の決定フローがパーツでしか動いていない点である。言い変えると、ある物事や事象を解決しようとする際、

本来ならばその解決法策等は様々な観点から議論され、構築していくべきだが、単一の視点でしかとらえていない例が多すぎる。つまり、トータルでの議論と構築になっていない。そして今一つは、当論文のタイトルでもある Critical Thinking が的確に成立していない（成されていない）点である。この実態はミュージアム（スタッフ）側もそして市民側も Critical Thinking の観点からは見直すべき点が多いということを如実に表しているものと検証している。

4. 議論のための具体的事例・・・中央博と当館の事例から

まず 1 例目として、企画展「生物多様性 1：生命のにぎわいとつながり」では文字通りの生物多様性を視点に、地域サステナビリティ、外来種、里山・里海、自然環境、社会環境、人と自然の関わり等の内容で構成した。特質すべき点は、2 か月の会期中に地元 NPO 等市民団体 8 グループの企画事業を併設したことと、環境問題を考える生きものにぎわい子供発表会を実施したことである。ここでは実施側である中央博と市民団体はもとより、展示の見学者や講座等の参加者の両者が子供から大人まで年齢を問わずに上記のような重要課題を共に考える場とした。中央博にとっても学ぶべきことが多い事業であった。市民団体の展開した事業は、普通であれば公的機関では扱わない、または扱いづらいテーマである遺伝子組み換え食品、産業廃棄物問題、海洋ゴミ問題等多岐に渡っていた。実施主体は各市民団体であるとはいえ、一つの企画展事業の中でのコラボレーションであることから、これらをミュージアムとして館事業の一環（館側が承認したもの）としてどう発信していくか、どういう位置づけで展開していくのか等、正にそこには Critical Thinking の視点が必要になってくる事象である。また、子供達だけの環境発表会は、まだ若い世代ではあるが今の地球環境をどう考えるか、そしてその環境が悪化しているとした場合、自分達は何をしなければならないのか等について意見を取り交わした。そこで展開された議論はある種理想論的なものもあったが、我々大人では様々なしがらみや制約から重要だと認識していたとしても積極的には体現しがたい取り組み等が活発に議論されていた。ここでも自然と Critical Thinking の意識が芽生えつつあると実感した。



漂着物のトランク・ミュージアム®
(一般社団法人 JEAN)



生きものにぎわい子ども発表会

2 例目は当館の企画展「ちばの海まるごと探究展」をとりあげる。3 項で記述した通り、この企画展では千葉の海の自然、歴史、文化等多角的な展示構成とし、生物多様性の維持や環境問題、持続可能な社会の実現等の現代社会の重要課題を取りあげた。この重要課題は、多様な生物相の維持をはじめ、現在も千葉県和田浦において商業捕鯨を行っている事実、そしてクジラ自体が我が国においては長い歴史を持つ捕鯨文化を支える存在であり、かつ、食文化の一端としても重要な位置付けとなっていること、さらに、銚子沖での実証実験を経て、今後、本格始動を目指している再生可能エネルギーの一つである洋上風力発電、加えて海洋ゴミ等である。

特にこの企画展では捕鯨漁具をはじめ、捕獲したツチクジラの解体の様子を動画で紹介する他、洋上風力発電の可動模型等の具体的な展示資料をもとに、捕鯨漁を起点とした国際情勢、再生可能エネルギーと生物環境や漁業等我々の生活との関係をスタッフ及び見学者自らが共に考える場を目指した。ここでも 3.11 でクローズアップされた原子力発電の問題→原子力に依存しないエネルギー活用計画→再生可能エネルギーの開発と拡充→自然界への脅威（破壊）→自然環境バランスの異変→新たな災害の要因の誘発・・・の連鎖フローについて課題提起し共有することで共に考える場の創出を図り、結果、Critical Thinking の重要性を示唆した。



古式捕鯨漁具（館山市立博物館蔵）



マイクロプラスチック観察



海洋ゴミ（銚子海岸でサンプリング）

3 例目は上記の再生可能エネルギーの在り方について、「海と日本 PROJECT ミッション 2021 自然エネルギーの活用で本来の地球環境を取り戻せ！～洋上風力発電を中心として～」のプログラムとして昇華させた。このプログラムは 2 日間の構成で中高生を対象に自然エネルギーと自然環境や漁業等生業との関係を様々な視点で考える場とした。貸し切りバスで銚子まで移動することからコロナ禍を鑑みて MAX20 名の定員とし、実際の洋上風力発電施設を船上から視察する試みと、2 日目には鳥類研究者と地域や漁業との共存共栄を視野に入れて活動されている有識者による課題提起方式の講義を経て、再生可能エネルギーの有効性だけでなく、その躯体や施設を設置することで自然環境や生活環境、社会活動にどのような影響があるのか、開発とは誰のためのものであり、その影響はどこに生じてくるのかについて考える場を提供した。

こういったテーマでのプログラム実施は招集する演者の選出にも留意しなければならない。当館では、再生可能エネルギーと生物環境や生活環境等の関連性という非常に難しいテーマを設定したわけだが、そこには公的機関としての中立性を一貫させ、再生可能エネルギーの可否

を問うのではなく、重要で必要なものではあるが導入するためにはこういった領域まで考えていかなければならないかの視点に議論を集約させることとした。このことから演者2名においても、再生可能エネルギーと環境を Critical Thinking の視点で語ることができる人選とした。

2日間のプログラムを経て、再生可能エネルギーの必要性和有効性、そしてそれらが生み出す生物との関係や我々の生活や生業面への影響について学んだ中高生達は、原子力に頼らないエネルギー開発＝All clear ではないこと、ある物事や事象を clear するためには様々な観点からのデータ収集とその検証が必要であること、そして、物事や事象は単一のパーツとしてとらえるのではなく、多方面からの視点を持って課題解決すべきであることを再認識した。ここでも次世代を直近で担う年齢層の若者に Critical Thinking の重要性を認識してもらい、自分達のミッションについて改めて考え、自覚する好機会となったと検証している。



船上より洋上風力発電視察
「東電 RP 銚子沖設備」



風力発電と鳥類との
関係を考える



風力発電と漁業との
共存共栄を考える

5. なぜ物事や事象に取り組む際 Critical Thinking の姿勢が必要なのか

3項においてミュージアム側もそのスタッフも、そしてその利用者である市民も Critical Thinking で物事や事象をとらえる必要があること、加えて4項においてその必要性を検証するために3例の議論素材を提起した。我々が物事や事象を受け入れ、それに対して自らが行動を起こす際に Critical Thinking の姿勢でそれらと対峙しなければならないことを再確認するためには再生可能エネルギーの施策決定フローの議論素材が一番分かりやすいだろう。

3.11 は我々に自然の脅威をまざまざと見せつけた。広域にかけて被害を誘発した津波は未曾有の自然災害として実像の形で目に焼き付いている。そして、メルトダウンは放射能という目に見えない脅威ゆえより一層の恐怖へと連鎖している。このことが大きく拍車をかけ、世界的に次世代エネルギーとして期待されている再生可能エネルギーへの移行は急務となっている。太陽光や風力、波力等の自然のエネルギーを活用するシステムはいわゆるクリーンで安全なエネルギー資源として期待されている。我が国においてもこのシステム開発は国策であり国をあげて推進していく方向性が示されている。筆者自身、原子力推進派でもなければ逆に反対論者でもない。このことは再生可能エネルギーにおいても同様であり、クリーンなエネルギー源で

あることは認めるが、安全というレッテルを安易に付すことはできないととらえている。何もって安全というかは様々な視点で検証していかなければ結論はでない。よって、原子力発電と同様に賛同も反対も無い。この意味から研究者は中立であることが望ましいといえるだろう。そして中立であるということは、どちらに賛成、どちらが反対と判断するのでは無く、あくまでそれぞれの専門分野の知見を有した研究者として、物事や事象に対して専門的な立場で課題や問題を提起し、そのための提案や提言を行うといったシンクタンク機能を体現することである。しかし、このシンクタンク機能は特に公的な立場の研究者にとっては中々体現することは至難の業といえる。その事例を以下に示す。

我々ミュージアムスタッフは、国や県等の施策であったとしても、そのこと（物事や事象）を Critical な姿勢でとらえ、多角的な視野で理解し、自らの行動（アクション）に転換していくことが重要である。言うまでも無く Critical Thinking（批判的思考）は物事や事象に対して闇雲に反対・反論・批判するのではなく、その事実を把握（認識）し、多角的かつ論理的に思考し、検証した上で自らの行動（提言）に移すことである。研究者はこの意識をもった上で中立の立場において物事や事象に意見する使命（シンクタンク機能）を有しているわけだが、このことは特に公的機関の研究者の場合は簡単なことではない。研究者としては当たり前の使命といえるのだが、実態を見るとかなりハードルは高い。例えば、上記にも提起した国の施策の一つである再生可能エネルギーについて意見を求められた場合、研究者は何をどこまで純粋に自らの専門領域の範疇で見解を述べることができるだろうか。

2015 年度に歴博を会場として開催された「千葉のフィールド・ミュージアムの現状と中央博物館の活動」（印旛沼環境団体連合会フォーラム）に筆者はパネリストの一人として登壇していた。各パネリストからのケーススタディーが一通り終了し、パネリスト同士の意見交換と会場参加者との質疑応答とフォーラムは進行していったが、その中で参加していた市民から「昨今の再生可能エネルギー、特にメガソーラ発電施設設置による自然への影響についてどう思うか」との質問があった。司会者はこの回答を筆者にうながしてきた。当時、筆者は中央博の自然誌・歴史研究部長であり、パネリストとして中央博の活動等についてケーススタディーを行ったが、上記の質問に対して当論考を読んでいる関係諸氏は何をどこまで自らの見解を述べることができるだろうか。200 名近く入る会場は満席でテレビや新聞といったメディアの顔も散見される。本来ならば一研究者として再生可能エネルギー設置の意味とその効果、そしてその設置に伴う自然への影響等に関して純粋に見解を述べることで何ら問題はないはずである。当然、筆者は一パネリストとして中立の立場で見解を述べた。その見解は言うまでも無く再生可能エネルギーの重要性と将来像、世界各国との比較、そして自然界への影響である。中立であるがゆえに再生可能エネルギーに賛同も反論も述べることなく、純粋にその必要性和効果を述べる一方、自然への影響は様々な面であると述べざるを得ない。そして 1999 年のブダベスト宣言、生物多様性戦略にも触れ、開発とは何かについても言及した。筆者の意図は再生可能エネルギーの良し悪しを述べるのではなく、「それぞれの立場に関連する全領域に目を向けて物事をとらえ、パーツ（単一）では無くトータル（多角的）に検証してアクションに転換する必要がある

ことを伝えたかったのである。会場に来ている聴講者の大半は自然保護や環境維持を当然と認識している列席者であることから筆者の見解は賛否で受け入れられただろう。人によっては「その通り」であろうし、「当たり障りのない（どっちつかずの）見解だ。あなたは賛成なの？反対なの？」と受け取る人もいるだろう。しかし、メディアを含め異論を持つ者も確実に存在する。国や県が目指している（推奨している）クリーンエネルギー政策に対して「公的機関の研究部長が施策に全面的に賛同せずに課題や問題を提起して反論している」ととらえられてしまうことも想定される。恐らく、大学の研究者であればそれほど大きな問題にはならないと推測するが、少なくとも公的機関の研究者が、特に環境に関わることについて見解を述べることはそれ相応のリスクを負うことは確かである。だからと言って、この段階で既に公的機関の研究者にシンクタンク機能はあり得ない（成立しない）と結論付けてしまって良いだろうか。

筆者の解釈は、こういった場で自らの発言や行動を世に発信する際、基底にあるべきことは Critical Thinking の考え方であるとしている。これは研究者も市民も何ら変わることはない。この部分は可だが、ここには課題や問題があることを単一の視点ではなく、多角的かつ論理的に検証して提起すべきであり、両者においてこの意識があってしかるべきだろう。

4 項の各事例は筆者が中核になって展開してきたものであるが、筆者は Critical Thinking の姿勢を貫くため、あえて様々な課題や問題をテーマ設定して、ミュージアムの事業を共に考える場の創出として位置付け、その場自体を Critical Thinking の重要性を醸成する場としている。組織として考えた場合、これらのように実行する際に様々な留意点を視野に入れなければならないテーマをわざわざ取り上げる必要もないという見解も当然あるが、そこを避けていたのではミュージアムが持っているメッセージ性の使命は希薄となるだろう。

6. まとめ

当論考では、「ミュージアムの社会的役割」について Critical Thinking の視点から事例提起するとともに、その重要性を検証し、ミュージアムの体現すべき使命を提言した。社会がミュージアムに期待しているところを把握（諸情報を入手）するのはミュージアムのスタッフに課せられた最低ラインである。そこを起点として全てが始まる。言い変えるとそこをしっかりと認識せずに館の運営や事業展開をしても意味はない。社会がミュージアムに期待しているところを把握し、事業に反映させていくためには、ミュージアム側が自然環境や社会環境、教育環境、行政的施策、国際情勢等の領域で Critical Thinking を有した上で展開していくことが重要である。そして、その姿勢で事業展開に資することで利用者へのメッセージは多角的で論理的な視点でとらえた内容となり、共に考える場の創出はより昇華された領域に達する。

加えて、この領域での事業を積極的に展開することは、ミュージアムを利活用するミュージアム・リテラシーの醸成につながり、さらには、サイエンスを Critical Thinking の姿勢でとらえることができるサイエンス・リテラシーの醸成に連鎖することになる。

当論考を素材としてミュージアムの関係者、ミュージアムを取り巻く全領域の関係者が議論することを期待したい。この取り組みこそが Interactive Museum そのものである。

引用文献、参考文献・Web サイト

- ・新和宏（2017.03）「自然誌・歴史博物館が具現化する Interactive Museum」日本ミュージアム・マネジメント学会『日本ミュージアム・マネジメント学会紀要第 21 号』17:29-35
- ・新和宏（2013.03）「博物館と社会の関係変化とその背景の解明 - 博物館を取り巻く社会情勢・教育情勢の変化」杉長敬治編『時系列データによる日本の博物館の動態分析』（科学研究費補助金基盤研究（C）研究代表者京都工芸繊維大学杉長敬治）p6-28
- ・新和宏（2008.02）『21 世紀型博物館評価制度の課題と提言－その導入、そして博物館の変革に向けて』日本科学協会笹川科学研究助成報告書
- ・「エネルギー基本計画（第 6 次）」（令和 3 年 10 月）経済産業省資源エネルギー庁

